

おまけSS 花鶏も鳴かずば撃たれまい

（先生と媚薬と出られない部屋。前日譚）

※当おまけSSは作品、キャラクターに関するネタバレが多分に含まれています。本編視聴後及びおまけSS01～05の閲覧後にお楽しみいただくことを推奨致します。

僕は足を引きずるようにして歩く。目的地まであと少しだ。

「ったた…」

体育の授業で短距離走をしている最中、コースの途中にあった石につまずき転倒し、右足首を捻ってしまった。元々僕は運動が好きでバスケットに入っているくらいなのだが、ちょっと本気を出しちゃおっかな、と調子に乗ったらこのザマだ。膝もボロボロになってしまっている。保健室なんてあまり来たことがないから少し緊張する。

「すみません」

ゆっくりと保健室の戸を開く。

「はい、どうしましたか？」

保健室には二人の先生がいた。一人は中年と言ってしまつて差し支えない年齢であろう女性。もう一人は二十代前半程度に見える童顔な男性。この仕事に就いていることを考えるに、この男性養護教諭の年齢は恐らくもう少し外見年齢より上なのだろうが、どう見ても大学生くらいにしか見えない。応対するのは女性の方、事務仕事をするのは男性の方、と役割が決まっているのだろうか。男性の方は僕の顔を見てニコツと笑つて、すぐに自分の目の前のノートパソコンに視線を戻した。

前まで通っていた学校では保健室の先生は一人だったが、多感な年頃のこの面倒を見るためには両方の性別の先生がいた方が都合が良いということだろうか。

「体育の授業中怪我をしちゃつて。走つて転んで膝を擦つたのと足首を捻つたので手当してもらいたいんですが」

体操着を軽く持ち上げて女性養護教諭に見せる。女性はいくら大変、と言い棚から消毒液と包帯とガーゼを取る。すると、女性のポケットから振動音が一つ、二つ。ケータイに着信があつたようで、女性は慣れた手つきで操作すると通話をし始めた。会話の内容は聞こえなかったが、恐らくこの学校の教師か誰かに呼ばれているのだろう。数回相槌を打ち、分かりました今向かいますと言ひ通話を終了した。

「ごめん、石流先生。私ちょっと呼ばれたんであと任せてもいいかな？」

男性養護教諭は石流先生というらしい。イシナガレ。どこかで聞いたことのある苗字で、これまたどこかで見たような顔をしている。

「あ、はいはい、お疲れ様ですー」

石流先生はノートパソコンを閉じ、椅子から立ち上がると僕に近づいてくる。

「ありゃーやつちゃったねえ」

膝の擦り傷を見て軽薄そうな笑みを浮かべながら治療の支度を始める。馴れ馴れしい感じが幼さを引き立てていて、余計に年齢が分からなくなってくる。

「んじゃあ手当てしましょうかねえ」

妙に舌足らずな喋り方をする人だ。こういう柔らかい声の男性はモテるのだろうと同性である男の自分からでも容易に察せる。石流先生は鼻歌混じりで手際良く膝を消毒し、ガーゼを当て包帯を巻いていく。まつ毛が長く、髪の毛も男性にしてはやや長めで女性的な雰囲気醸し出している。

「捻ったのって右かな？テーピングしとくね。あまり痛みが長引くようだったら病院に行っておくよーに」

「え、あ、はい」

驚いた。まだどちらの足が捻ったと伝えていないはずだ。見た目でも左右に大した差はな

い。こなれているところを見るに、やはり石流先生は若い新しい先生というわけではなさそう。

「ん、よし完成」

石流先生は両手を広げ、ぱぱーんと効果音が鳴りそうなポーズを取る。

「体育の授業中、張り切りすぎないように注意してね。テンション上がっちゃうのは分かるからさっ。あー僕も走りたいなー、というか今走れるかなあ？」

石流先生は両腕を前後に振り、走っているかのような動きをする。身振り手振りの激しい人だ。

「そだ、君何組？」

体操着の色が学年分けされているため、自分が何年生なのかは分かるはずだ。組数まで聞く必要などないはずだが。

「二組ですけど」

「おーおーそうかそうか、僕の甥っ子と同じクラスだ」

石流先生は屈託のない笑みを浮かべる。僕の頭の中で点と線がつながった。

「甥っ子。石流……燕さんですかね」

クラスメイトの顔を思い浮かべながら名前を口にする。年齢にしてはやや小柄な体躯で、で

も頭にはすっかり脳味噌が詰まっているのか賢く成績優秀な子だ。珍しい苗字、出席番号が若い、それに学年内でも有名人と来れば、同学年で知らない人間はいないだろう。石流先生と石流さんは叔父と甥の関係だったのか、知らなかった。どちらかという、兄と弟と言われた方がまだ納得ができる気はする。

「そそ！よかったら燕くんと仲良くしてね、あの子友達少ないから」
「はあ」

正直近寄りがたいクラスメイトの一人だ。適当に相槌を打つ。

「君、部活は何やってんの？」

石流先生は僕の生返事を気にも留めず質問を続けた。

「バスケットです」

「ほーなるほど、腕にも脚にも筋肉がきちんと付いてるわけだ。それの他になんかやってんの？」

「なんかって」

「んー役職……とか？」

役職で。会社に勤めてるんじゃないしあるまいし。

「あーえと、クラスの委員長してます」

誰もなりたがらないクラス委員長。なかなか決まらないことに痺れを切らしたのと、自分で言うのも何だが：持ち前の真面目さ故か、つい挙手をしてしまつて自分に決まつてしまつた。委員長とはいえど特別な権限があるわけでもなく、ていのいい雑用係というだけだ。

「おお、委員長。偉いねえ」

他愛ない会話が續く。手当てが終わつたから戻つてもいいのだが、折角の機会だから喋つていくことにする。

「石流先生、モテそうですよね。女子受けしそう」

この人の甥である同じクラスの石流燕とは雲泥の差だ。優しく朗らかで人当たりがいい。そういえば教室で女子が保健室の先生がかっこよくて、と話していたっけ。保健室に用事のない僕はピンと来なかつたが、確かに納得だ。

「えっなに、急に。三十路をおだてないの」

三十路。…三十路！？どこからどう見てもそんな風には見えない。せいぜい二十代中盤くらいだ。

「石流先生、三十歳なんですか。もっと若いかと思つてました」

「もー若いとは言えないかな、なんだかんだでここに勤めてから十年近く経とうとしてるしで」

妙な間が生まれた。

「……僕の話はいいとしてっ」

年齢に関してはあまり触れられたくないようだ。当然といえば当然だ。

「君は好きな子とかいるの？」

「まあ、気になっている子なら……」

嘘ではないが、本当と言ってしまうには微妙な程度の好意を寄せている相手はいた。

「あーいいねえ、いいねえ」

ニコニコとしながら両手で頬を抑える姿はさながら乙女だ。僕は頬に添えられた手をじっと見る。

「……先生は結婚してないんですかね？」

左手の薬指には何も付けられていなかった。

「う……。デリケートな話題すぎる……。悲しいことに、恋人もいないんだよねえ」

「先生こそ、好きな人くらいいいないんですか？」

「んー……んふふ、ま、ね」

石流先生那不適に笑う。この反応は、好意を寄せている相手がいるということだろう。

「あー……はは、クラスの女子達残念がりそう」

「?どうして」

わざとなのか、鈍感なのか。この反応を見るに後者なのだろう。

「クラスの女子が先生のこと噂してたんですよ。かつこいいなとか、タイプだとか」

「えっ、そ、それ本当に?えーどうしよう、困っちゃうな。あ、いや、でも僕は先生だし、生徒とは関係は持てないから」

少し頬を染めながら石流先生はぶんぶんと手を振る。

「と、ところでどんな子が言ってたの?」

「ばっちり気になってるじゃないですか…」

関係を持ってない、とか言っておきながら。

「えーと、クラスの中でもあまり目立たない方の子…ですかね」

いくら三十路とはいえど、キラキラした感じの、モテている感じの女子が好きだろう。恐らく。残念がるか?と思いきや。

「えっそうなの?!」

石流先生はカースト上位の女子よりは大人しめのお淑やかな女子の方が好みなのだろうか。あからさまに喜んでいる。

「美術部に入ってる子なんですけど、市のコンテストで賞を取っていたりするくらい絵が上

手な子なんですよ」

「……………ああー、そうなんだ。え、すごいねそれー」

「…？」

引っかかる程の間があった。ニコニコしている石流先生からの表情からは何一つ読み取れない。

「あ、ごめんごめん、その子の顔を思いだそうとしてて。そういえば前にお腹が痛いとかで休みに来てた気がするー」

にへら、と笑った顔を僕に向ける。童顔で端正な顔立ちで、いつ見ても笑顔な石流先生は確かにモテるわけだと納得する。

「よく覚えてますね。保健室、それなりに人が来そうなのに」

「ん、まあねえ。僕勉強はあんまりできなかったけど、変なところで記憶力が良いっていうか。よく話した人は特に記憶に残るんだよね」

「君のこともばっちり覚えたよ」

石流先生は前に乗り出し、僕の耳元に唇を近づけた。

同性だというのに、女性的な雰囲気を持っている石流先生に近づかれて思わずドキッとしてしまった。

「……………くん♪」

「えっ」

僕はまだ名乗っていなかったはずだ。しかし、名字だけならまだ分かる。体操着に刺繍されているから。何故フルネームを知っているんだ…？

「んふふ、甥のクラス…二組の子に関しては特に生徒の名前を頭に叩き込んでるんだ」

「甥と仲良くしてくれる子はちゃんと言見張っておかないと♪あの子気が強いから、いついじめられないか心配だしね」

「ひえっ…先生、甥のこと大好きすぎでしょ」

「あはは、冗談冗談ー」

全然冗談には見えなかったのだが。

「目指すは全校生徒の名前と顔を一致させる、なんだけどなかなか難しくてねえ」

「普通無理ですって、ただでさえ一年に一学年分丸っと入れ替わるんですから」

「そ、だから甥のクラスだけ覚えたんだよー」

だから、とはならないだろう。朗らかな雰囲気とはちぐはぐな…結構変な人だ。

「何で変なところで記憶力がいいのかねー、この力を勉強とか仕事とかに活かせればよかつ

たのに」

石流先生はスッと立ち保健室の窓を開ける。

「まあ、役に立っているといえど立っているか」

カーテンで石流先生の顔が翳る。一瞬、朗らかな雰囲気が消えた。冷たい顔。僕の前ではずっと笑顔を絶やさなかったから、少しだけドキッとしてしまった。

ひらり。

窓から入ってきた風でプリントが一枚事務机から落ちた。

「おっと」

石流先生が屈んで拾い立ち上がる。その瞬間、僕の全身が凍った。

「っ」

「どうしたの？」

拾われたプリントは元の位置に置かれ、また風に吹かれて飛ばないように重し代わりにずっしりとしたクリアフォルダを上に乗せられた。

「あ、いえなんでも」

思わず後ずさりをする。

（気付いていない…のか？）

僕は慌てて愛想笑いをする。

「またなんか困ったことがあったらいつでも来てね。お悩み相談も進路相談も受付中だから」

石流先生は気付いたのか気付いていないのか、ひらひらと手を振り僕を見送った。

保健室の戸を開け、僕は退出した。ゆっくりと戸を閉じ、溜め込んでいた空気を鼻からゆっくりと吐き出す。

「……」

見てしまった。

石流先生の着ている、季節外れのタートルネックの首元と袖口から。

「あれ、何の跡だ…？」

首には何かで締め付けられたような跡が。手首にはおびただしい量の傷跡が。

「リストカット…？」

あんなに朗らかで温和な人でも何かを抱えているものなのか。

「なるほどなあ、委員長、ねえ」

保健室に一人きりになった竹千代はそう呟く。

「あの子のことを直接聞きたかったんだけど、流石に初対面で聞いたら怪しまれるよねえ」
竹千代はにへらと笑う。その笑みは、純粹無垢そうな裏に何かそこはかとしれない闇を含んでいた。

「彼女がクラスでどんな風にいるのか、人伝に聞きたかったんだけどなあ」

「まあでも、ちゃんとは繋がりは作ったし。次に機会があったらそれとなく聞いてみるとするかあ」

メモメモーと、竹千代は鍵付きの引き出しの中に入っていた手のひらサイズのノートに記す。

『二組 名前…… 男 委員長 バスケ部 怪我ー体育 転倒 捻挫 擦り傷 手当て』

『真面目 時計をしきりに見ていたがこちらが喋り倒していたら返してくれた』

『比較的友好的 こちらが喋れば喋るタイプ』

『罪悪感を持ちやすい傾向』

『好きな子がいる 恐らく同級生可能性大』

『交友範囲は広い 甥とは面識があるものの仲良くなさそう』

『自分の傷を見ても何も言わなかった 理解できなかったのか、面倒だったからなのか』
『可哀想な人間だと思われたのなら正直都合が良い』

『警戒心は強い』

『ただ、警戒心を解きさえすれば何でも喋ってくれそう』

他のページにも似たような内容が紙にびっしりと書かれている。全員二組の生徒の名前だ。字は綺麗だが、一ページの文字数が尋常じゃないため呪いの儀式の一種なのか、はたまた写経なのかと勘違いされそうなくらいだ。

「これでよーしっと」

ページの左上に『A』と書き、竹千代はペンとノートを引き出しにしまい鍵をかける。

「はーあ、僕も二組の生徒になりたーい」